

『部活動』

中学・高校と部活は、バレーボールでした。私が中学生の頃（1970~1972）は、バレーボール人気は相当なものでした。

なぜ人気があったかという、あくまで私の推測ですが、①東京五輪(1964)での女子バレーボールの金メダル以来、バレーボールという競技への国民の関心が高かった。②当時の男子バレーボール日本代表チームが世界レベルで強かった。1972年開催のミュンヘン五輪では金メダルの有力候補でした。③実業団リーグ（今風に言うと「Vリーグ」）の試合がゴールデンタイムで放映（ほぼ定期的に）されていました。③バレーボールを扱ったアニメ「アタックNo.1」やドラマ「サインはV」が放映されていましたが、超人気番組でした。また、五輪応援番組とでもいうような実写とアニメの融合番組「ミュンヘンへの道」が、日曜日の夜7時半から8時まで放映(1972)されました。松平康隆監督率いる男子日本代表チームがミュンヘン五輪での金メダルを目指す「8年計画（東京五輪後の）」をドラマ仕立てにしたものですが、これがすこぶる面白かったです。

（もし、当時「スラムダンク」のようなバスケットボールを扱った人気アニメが放映されていたら、バスケットボール部に入っていたかもしれません・・・）

以上、当時の男子日本チームの実力が世界トップレベルであったことと、当時のメディアが積極的にバレーボールを取り上げていたこと、この2つが、バレーボール人気の大きな要因だと思っています。（ちなみに、ミュンヘン五輪では、男子日本代表チームは準決勝で「ミュンヘンの奇跡」と地元メディアに称賛された劇的大逆転勝利を経て、決勝では東ドイツに勝ち、見事金メダルを獲得しました！）

足かけ6年、バレーボールに打ち込みましたが、このことから、私は大きな財産を得たと思っています。

まずは、一定の技術を獲得できたこと。体に、バレーボールの基本的な動きがしみ込んでいるので、社会に出てからもバレーボールに関わることができました。20代までは、6人制バレーで、教職員互助会の体育大会で全道大会に出場することもありました。30代からは「ミニバレー」に転向しレクリエーションが主になりましたが、ケガしないよう留意しながらもプレーを楽しむことができました。ミニバレーでは、保護者や地域の方との交流の機会も多く、共に汗をかき、声を出し、楽しい会話をしながら、良好な人間関係を築くことに大きく寄与していました。

また、高校時代はキャプテンを務めたこともあり、練習や試合を問わず、チームメイトへ声をかけることが多く、その結果、他者とのコミュニケーションがそれほど苦にならなくなりました。このことは、教職生活において大いに役立ちました。

加えて、「ここぞ！」という“勝負の分かれ目”を見極める感覚が、それなりですが培われたことも、仕事上では役に立っています。

ただ、右ひざの関節と腰を痛めました。これは生涯付き合っていかなければならない代償となりました。

さて、中高と、部活動の恩恵を目いっぱい享受してきた私ですが、教員になってからは、部活動に対する思いは、少々複雑になります。

教員を小学校からスタートしたということが大きかったと思います。小学校には、部活動はありません。子どもが下校したら、授業の準備や担当業務の処理等、自分の裁量で使える時間がけっこうありました。土日も、基本は自分の時間です。その地域には、少年団（野球やソフトボール）もありましたが、それに携わることはありませんでした（当てにされていなかったと思います）。

ですから、2校目の中学校での部活動の指導は、正直なところ、気持ちの上ではあまり積極的ではなかったと思います。1年目は、卓球部の顧問でした。専門分野でもなかったし、中学校教師1年目ということもあり、生徒からも学校からも結果を期待されていなかったのも、生徒と一緒に卓球を楽しみ、部活動の運営がそこそこな状態であれば良しと見なされていたと思います。

2年目からが大変でした。男子バレー部の顧問が異動となり、その役が私に回ってきたのです。前顧問は、日体大出身で、バレーボールのスペシャリスト。指導力抜群で、生徒との信頼も厚かった。正直「やりづらいな」という気持ちと、それなりのプレッシャーを感じていました。ですが、私は、特に指導法の勉強はしませんでした。これまでの経験から、練習メニューを組み立てることはできましたし、それなりに手本を見せることもできましたので。でも、試合には勝てなかった。試合に勝つことの難しさを痛感しました。そして、この程度の練習ではそうそう勝てるものではないとも感じてはいました。

ある指導者から、「試合開始の礼をした後、生徒がコート内を駆け回って声を出すのですが、ぼくは、その練習を徹底してやりますよ」という話を聞いたとき、私は「そんなことまで練習するのか？」と思いました。彼は、「試合に勝つためには、そこから、相手チームにプレッシャーをかけるんです。そして、生徒たちの闘争心を鼓舞するのです」と答えました。脱帽しました。勝つための執念と緻密な計画性を感じました。

「すごいな」と素直に思いましたが、「彼のようにになりたい」という心の動きは起きませんでした。おそらく、部活動に対してやや冷めた感覚があったのだと思います。「そこまでのめり込めないな」「本務でいっぱいいっぱい。部活動まで余裕がない」という気持ちはぬぐえませんでした。一方で、「彼のように打ち込んで、生徒と勝利の喜びを味わえたら、それはそれでいいだろうな」という気持ちも少しはありましたが。

ちなみに、中学校・高校の教師には、「部活指導が生きがい」という方がいます（私の主観ですが）。土日の練習は当然。朝練もやる。そこに結果が伴ってくると、生徒の意欲は向上し、師弟関係も良好となり、このことが学級経営や教科指導にも生きてくる。これはこれで、好循環となり、「いいな」と思います。「部活動があるから、生徒指導が成り立つ」と言う方もいます。「そういう考え方もあるな」とも感じます。しかし、生意気なことを言いますが「部活動以外のところで、生徒に満足感や充実感や達成感を味わわせることをまずは大事にしたい」と思うのです。

今、働き方改革の一環で、部活動の時短が求められています。私は、とてもいいことだなあと考えていますが、先日のテレビで「もっと練習したい。技術を向上させたい」という中学生のために、ある自治体が地域の方（実業団のコーチ等）が指導する“公設クラブ”（有料で一回500円）を開設したというニュースを見ました。生徒にも指導者にも、概ね好評のようです。

中学・高校では、部活動は当たり前であり、教育活動の一環となっています。その良さは、十分に理解していますが、その在り方については今でも複雑な思いがあります。